

## 戦後の南アジア

- 1) インドを中心に、セイロン、ビルマの場合  
インドではガンディーやネルーを中心とする国民会議派が大戦中から即時独立を主張。【1: 1947年】が率いる全インド=ムスリム連盟はムスリムの国家パキスタンの建国を主張。統一インドを主張するガンディーらと対立した。  
これ以降はNo.179で既出。参照。
- 2) ビルマについてはNo.180参照。

## 戦後のイラン

イランは大戦中中立国だったが、米ソ軍の駐留を許したが戦後も容易には撤退せず、撤退を要求する民族運動が高揚した。彼らは、「資源にも民族の主権が及ぶ。民族の自立には経済の裏付けが必要」と考え、イラン産原油を独占するイギリス系企業、アングロ=イラニアン石油会社の国有化を求める世論が高まった。

- 1951年 急進民族主義派が、アメリカと結びついたパフレヴィー朝※1を打倒、政権を掌握。  
**モサデク首相、【2: 1953年】**を断行。アングロ=イラニアン石油会社を接収。
- 1953年 モサデク政権崩壊……米英の支援を受けた国王**パフレヴィー2世**のクーデター。石油資源国有化も挫折。  
**パフレヴィー2世**位1941-79 政権に復帰。親米独裁政権である。  
パフレヴィー2世はいわゆる**白色革命**を実行（1953-）、アメリカの経済援助と石油収入で軍や首都の近代化実行。
- 1979年 パフレヴィー朝崩壊 ← **イラン革命**（パフレヴィー2世の親米・独裁を打倒する革命）  
指導者は**ホメイニ**、シーア派、イスラーム原理主義。強烈な**反米・反ソ**政権が誕生した。  
※1 あるいはパフラヴィー朝、王名もパフラヴィー2世とも表記する。

ここで、一般的な教科書の常識的記述順序を無視して一連の中東戦争をすべてまとめる。

## 第一次中東戦争（パレスチナ戦争）

- 1) イギリスの委任統治が終了するパレスチナでは、それまで居住してきたアラブ人、ヨーロッパから来たユダヤ人移民がそれぞれ、それまでの経緯に基づき、自分たちの独立国を建設しようとした。  
1945年3月 【3: 1947年】※2 結成……既に独立していたアラブ諸国の連帯組織！  
1947年 【4: 1948年5月】は**パレスチナ分割案**を決議（パレスチナをユダヤ人国家とアラブ人国家に分割する）。アラブ人はこれを拒否した。  
1948年5月 パレスチナ分割案を受け入れたユダヤ人は【5: 1948年】を建国した。  
1948年 ユダヤ人が【5】の建国を強行したとして、アラブ諸国との間で戦争になった。  
※2 エジプト・シリア・イラク・レバノン・トランスヨルダン（1949年、ヨルダン王国に改称）・イエメン・サウジアラビアのアラブ7カ国で構成され、アラブの統一行動をめざした。1970年代までは、アラブ民族運動の中心的役割を担った。

【6: 1947.11】（=パレスチナ戦争） 1948.5～49.3 勝者はイスラエル  
1947.11の国連総会で決定されたパレスチナ分割案に基づき建国したイスラエルと、それを認めないアラブ諸国との戦争。アラブ側が大敗。イスラエルはパレスチナ分割案以上の土地を占拠した。  
イギリス・フランスはイスラエルを支持した。

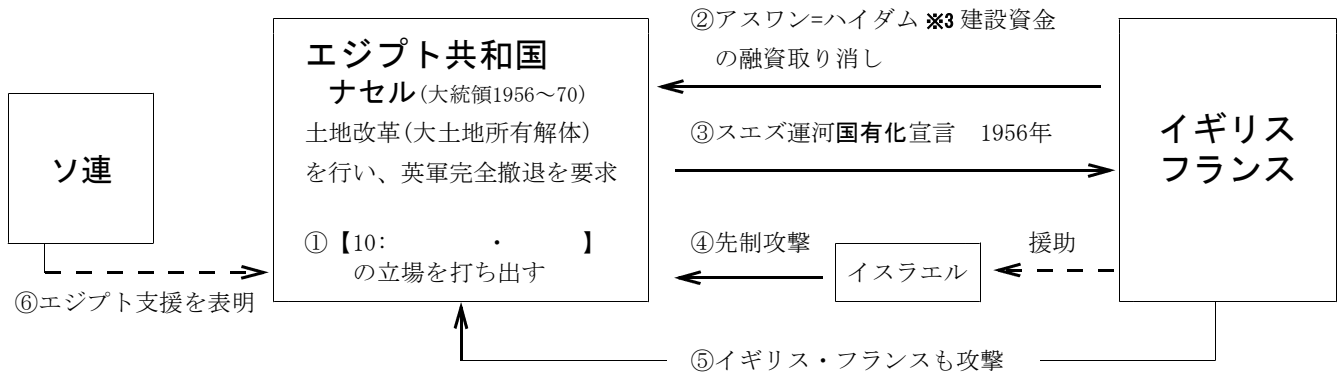
- 2) 国際連合の調停で、イスラエルは独立を確保した。このとき、パレスチナの80%がイスラエルの支配下に入り、百万人を越えるアラブ人が難民になった。これが【7: 1949年】の起源である。国連はパレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）を創設した。**イスラエル建国の衝撃からアラブ民族主義が強まった！**このパレスチナ問題は、長く紛争要因となり、今日に至るも解決を見ていない。

## 第二次中東戦争（スエズ戦争）

《ここまでの経過》エジプトでは、1918年頃、民族主義政党**ワフド党**がサアド=ザグルールを中心に地主や民族主義者によって結成された。1919年に革命を起こし、1922年に独立を達成し、1923年に憲法が施行され、ムハンマド=アリー朝の国王を君主とする立憲君主制に移行した。ワフド党は、1924年、政権に就いた。1936年にはイギリスとの間で同盟条約を結んだ。第二次世界大戦後、前掲の第1次中東戦争の敗北も、このワフド党政権下であり、同党への不満がエジプト革命の大きな要因である。1952年のエジプト革命で解散を命じられた。なお、解散当時、幹事長を勤めていた**ファード=セラゲッディーン**によって、1978年旧ワフド党を復活させる形で新ワフド党が結成された。

- 1) 1952年 ナセルが組織した自由将校団による【8: 1953年】が起き、**ムハンマド=アリー朝（ファルーク1世）**を打倒した。指導者は、ナギブ、ナセル。その成功は周辺諸国の人々を励ました！  
1953年 エジプト共和国成立。初代大統領はナギブ。改革を進めようとするナセルと対立。  
1954年 ナギブ失脚、追放される。**ナセル**が大統領に就任。
- 2) ナセル大統領は、近代化のためにナイル川中流域に**アスワン=ハイダム**の建設をめざした。ナセルは非同盟運動のリーダーであり、積極的中立政策（手短かに言えばソ連寄り）をとっていたため、イギリス・フランスは一度は合意した建設資金の融資を取り消した。ナセルは建設資金確保のため【9: 1956年】の国有化を宣言した。

以下の図式において、①～⑦は起きた順を示す。



⑦国際連合：即時停戦決議。侵入軍は撤退

※3 アスワン=ハイダムは結局ソ連が援助して1960年着工、71年完成。アブシンベル神殿は全世界のカンパで移転、水没を回避した。

【11: ( =スエズ戦争) 1956. 10~57. 3

エジプトのナセル政権が1956年、スエズ運河国有化を宣言したことに対し、イスラエルが突如エジプトに侵攻し、次いでイギリス軍・フランス軍も出兵した。この行動は国際世論の批判をまねき、国連の即時停戦決議とソ連のエジプト支援声明で侵入した軍隊は撤退を余儀なくされた。

- 3) ナセルは第二次中東戦争（スエズ戦争）に勝利、一躍アラブ民族運動の英雄とみなされた。1958年2月 ナセルはエジプト、シリアを統合して**アラブ連合共和国**を樹立した（1961年、シリアが離脱して解消した）。その直後に、これに対抗して、ともにハーシム家君主国であるヨルダン王国とイラク王国は**アラブ連邦（1958年2月14日～8月2日）**を構成したが、同1958年7月14日に革命でイラク王国が倒され（イラク革命）共和政に移行、わずか半年で崩壊した。なお、イラク革命（1958年）、イエメン革命（1962年）、リビア革命（1969年）もこの時期で、共和制の国家が増えることに、サウジアラビアやヨルダンなど王政の国は警戒を示した。

## 第二次中東戦争後の西アジア

- 1) 第二次中東戦争後の1960年、【12: ( =OPEC) が結成された。アメリカ・イギリス系の国際石油資本に対抗するために、主要産油国が結成した協議機関。原油の生産量や価格を協定する一種の国際カルテルの面を持つ。1970年代には、原油価格の決定権の獲得、石油資源国有化、経営参加の拡大などを様々な場で要求した。
- 2) 【13: ( =アラブ連合共和国) では1961年9月に陸軍将校団によるクーデターが発生し、エジプトとの連合が解消され再独立。これで、アラブ連合共和国は解体。シリアでは1963年3月8日の革命により【14: ( =シリア共和国) が政権を獲得したが、大統領や党・軍・治安機関幹部による集団指導体制であり、バース党（及び衛星政党）による一党独裁である。バース党内部の対立は激しい。バース党（バース党とも表記）は、シリア・イラクなどで活動するアラブ民族主義政党で政党名はアラブ社会主義復興党。「大西洋からペルシア湾に及ぶアラブ語民族完全な統合」を第一目標とし、さらに社会主義経済の建設を目指すというが、社会主義といっても私有財産制は認めるのでマルクス主義ではなく、主たる敵は欧米の資本主義とユダヤ人のシオニズム（及びそれによって成立したイスラエル）であると主張する。1971年アサド大統領就任。1980年以降はソ連の援助受け、2000年にアサド（息子）が継承。2011年以降内戦状態
- 3) 1962年9月、北イエメンでサッラール大佐の指揮する軍部によりバドル国王の王政が倒され、共和政が樹立された。これをイエメン革命（1962年）という。国名はイエメン=アラブ共和国。しかしサウジアラビアの支援を受けた王政派とエジプト（ナセル大統領）の支援を受けた共和国軍との間に内戦が続き、アラブ国家同士が争う事態となった。内戦が最終的に終結したのは1969年5月であった。

## 第三次中東戦争（6日間戦争）

世界は東西冷戦の中にあり、東西両陣営とも石油資源の確保から中東への影響力を増すため、大量の武器を輸出した。イスラエルの軍事力はとりわけ大きかった。

【15: ( =6日間戦争) 1967. 6

1967年、アメリカに支援されたイスラエルは攻勢に出た！これが第3次中東戦争である。イスラエルが、エジプト、シリア、ヨルダンを先制攻撃し、6日間で圧勝した。イスラエルは、シナイ半島、ゴラン高原、ヨルダン川西岸、ガザ地区などを占領。支配地域はいっきよに5倍になったが、更に約百万人のパレスチナ難民を出した。 OIK  
エジプト、シリアは惨敗し、エジプトのナセル政権は大打撃をこうむり、その権威は失墜、アラブ民族主義運動は退潮した。武力によるイスラエルの解体、パレスチナ解放という主張はトーンダウンせざるをえず、アラブ民族主義は穏健な方向に向かうかに見えた。

No.196に続く。